

The Well-Beloved : 恋の亡霊

内 藤 歆 修

作者 Thomas Hardy の傑作の1つであるが、問題作視された *Tess of the d'Urbervilles* が 1891 年に出版された翌年の 1892 年 10 月 1 日より 12 月 17 日まで、本作品 *The Well-Beloved* は the Illustrated London News に 12 週間に亘って、The Pursuit of the Well-Beloved という題名で連載された。これは 1889 年 *Tess* の雑誌連載用の原稿が多く、点で出版社に問題点を指摘され、出版を拒否されたときに、その代わりとして書き出されたものである。*Tess* が道徳上問題視されたので、*The Well-Beloved* は the Victorian prudery に逆らわぬよう配慮して書かれてはいるが、次作の *Jude the Obscure* の構想やテーマも心の中に育っていたであろうハーディの筆が *Tess* や *Jude* と全く無縁の物語を作り出すのは難しかった。この小説の主題は *Jude* に近く、市民モラルに反する激しい感情の持ち主の恋愛遍歴の物語である。ハーディはこれを直ちに本の形にまとめて出版することはせず、*Jude* の出版の後に、大幅な変更を施し、1897 年 3 月 16 日に現在の題名 *The Well-Beloved* で、Osgood, McIlvaine 社から単行本として出版した。この変更は雑誌に連載された最初の部分が削除され、後半の最後の部分が改変され、改訂なのか別の物語に造り替えたのか分からない程徹底的なものであった。特に物語の結末は全く別なものとなっている。この時期のハーディの作品の制作順は *Tess*, *The Well-Beloved* の連載版, *Jude*, *The Well-Beloved* の単行本となり、*Tess* と *Jude* の間を縫って本作品が書かれている。ハーディはこの改訂版をもって小説の筆を折り、以後詩作に転ずる。

これら作品の制作年代順を考えれば、本作品の構想や主題は、*Tess* や *Jude* を執筆していたときには作者の心に内在していたであろうという指摘¹⁾を俟つまでもなく、*Tess* や *Jude* との間に多くの共通点を含んでいることは充分に有り得るし、当然であると言えるであろう。題名中の Well-Beloved という語は、*Tess* の原題であった Too Late Beloved から取られている。連載版では主人公 Jocelyn Pierston と Avicé³ 世との間の結婚はかなり悲惨なものとなっていて、そこに提出されている問題は、*Jude* において Jude と Sue が体験し苦悩する問題でもあり、主要なテーマともなっている。R. H. テイラー²⁾ は、連載版はテーマや傾向が幾つかの箇所や場面で *Jude* と似通っていることを例証し、殊に結婚問題の扱いについては類似性が顕著であることから、*Jude* 完成後は大幅な改定を行わざるを得なかったろうと言っている。その結果作品の出来上がりは、*Jude* や *Tess* より優れているとは言えないが、内容的には異なった印象を抱かせるものに仕上がっている。

The Well-Beloved はハーディの主要作品とは違った特質を持っている。*The Mayor of*

Casterbridge の Henchard を除き、他の主人公は殆どが貧しくて、あばら屋に近い住居に住み、貧乏に脅かされて、一日中苦しい労働に追い回されている。実際の生活の中で過酷な肉体労働に喘ぎ、生きること汲々として一日を送っている。しかし、*The Well-Beloved* の Jocelyn Pierston はこのような貧困や生活苦などとはほぼ無縁な生活をし、自己の美の世界を思うままに追求することが許される新進気鋭の彫刻家、将来を嘱望された芸術家として登場する。‘A Sketch of a Temperament’ という副題が与えられているのは、‘A Story of a Man of Character’ の副題を持つ *The Mayor of Casterbridge* 同様、ハーディの個性的人間への関心を示すもので、Pierston も Henchard と同じく個性が強く自分の魂に内在するものに振り回され、一定の財産を所有するようになって、精神的に安定した平穏な生活は得られない。その芸術的能力が一般市民生活においては弱点と見なされるような (IIvii)、空想的で芸術気質の Pierston は、プラトンのイデア的な理想美を追求しながらも時の経過という克服不可能な現実には敗れてしまう。そこには生きるための生活に苦しむ姿ではなく、観念的な愛の理想を求めて彷徨する夢の探求者の姿がある。*The Well-Beloved* という題名は恋愛遍歴の主題に相応しいものであろう。

ハーディは青年時代における、プラトンのイデアの魅力と詩的感興に対する興味に言及して、その本作品への影響について述べている³⁾。この Platonic Idea が ‘the Well-Beloved’ 「恋の霊」へと変形し、Pierston の探求の対象となり、彼の心を悩ませて行く。この the Well-Beloved が宿る女性の具体像が *The Early Life of Thomas Hardy* の中に示されており、1889 年 2 月 19 日付けの日記⁴⁾ には、「1 つの顔が 3 世代かそれ以上の世代に受け継がれるという筋書きで時の経過についての優れた小説か詩が出来よう。個性の違いは無視する。[この考えがある程度実行され、小説 *The Well-Beloved* と詩 *Heredity* が作られた]」とある。このようなハーディの考えそのものが忠実に反映され、*The Well-Beloved* を構成している。この作品の主要テーマは Platonic Idea としての美の観念と恋愛の結合であり、その理想美を兼ね備えた女性像を追い求める Jocelyn Pierston の恋愛の遍歴が主筋となっている。

ロンドンに長く住んでいた彫刻家 Pierston は久し振りに故郷に帰り、幼馴染みの Avice Caro を、結婚の約束をする程愛し、その後約 20 年毎に Avice Caro の娘、孫娘と 3 代に亘って Avice という女性を愛するのである。しかし、どの Avice とも直前まで行くが結婚は出来ず、理想の女性と結ばれることはない。この特異な空想癖を持つ芸術家が恋の霊というプラトンの観念の映像としての恋愛性を求めて恋の遍歴を続けても、実体のない幻を手に入れようとするようなもので、恋の成就が出来ないことは明らかである。

作者はこの物語の舞台の 1 つに、想像力に富み理想を追い求める芸術的気質を生み出した異様な伝統と風俗の島ポートランド半島を選んでいる。実際は半島であるが、小説では「石投げ人の島」(The Isle of Slingers) と名付けられている。「時がただ 1 枚の岩から削り取って

作った」ポートランド半島は、ウェセックス南西部に渦状に突出しており、「ウェセックスのジブラルタル」と呼ばれている辺境の地でもある。ここは「石投げ人の島」という名の通り、石伐場の多い所で、殆どの島民は何らかの形で石灰岩採掘に関係している。彫刻家が育つ格好の場とも言える。また半ば本土から切り離された島でもあるので、本土では見られない植物が生育し、人々の間にはまだ島に昔から伝わる特有の風俗が残っている。更に異教の神々も或る程度その勢力を保っていて、全てが昔のままに、時代の流れから取り残されているように見える。実際にはイングランド本土とは海の波に洗われる程の狭い陸地によって結ばれてはいるが、本土とは隔絶した別世界のようなものである。この幻想を追う男に相応しい舞台となっている島の地形や自然を、作者は閉ざされた空間として岩肌一枚に到るまで詳細、克明に描いている。しかし、この地と Pierston の魂との結び付きは薄く、克明な描写がされればされる程、返って非現実的で観念化された雰囲気強調される。島民も本土からやって来る人間を余所者 (Kimberlin) と呼び、殆ど彼らとは交わりを持たない。Pierston も島の実生活とは関わりのない余所者である。彼の生活の場であるロンドンも生活臭が払拭された描写となっており、彫刻家としての魂が遊ぶ、芸術活動の重要な空間すらも非現実的に提示されている。島と都会双方についての非現実的描写が対置されることによって、異様な抽象性が増幅されて現れている。

Pierston は石材商の一家の出身で若くしてこの島を出、彫刻家となってロンドンと故郷のこの地を往き来する。一種の根無し草のような生活を送っている彼の実人生への関わり方の特質が、この石投げ人の島との関係に如実に現れている。彼は、島民とは違って堅固な石灰岩に直接的な関係を持つのではなく、間接的に、その石材を利用する彫刻家である。故郷の島に対しても同じ関係を保っている。即ち、余所者として故郷の石で彫刻作品を創作することを通して、故郷に距離を置きながらも、間接的に関わっているのである⁹⁾。彼の故郷に対する思いはロマンティックな歴史的記憶に深く結び付いている。ヴィーナスの神殿や、多分それよりも古い、石投げ人の愛の女神の神殿もあったという伝説を胸に抱いている彼の歴史意識は彼を島と強く結び付けている。

...under their front, at periods of a quarter of a minute, there arose a deep, hollow stroke like the single beat of a drum, the intervals being filled with a long-drawn rattling, as of bones between huge canine jaws. It came from the vast concave of Deadman's Bay, rising and falling against the pebble dyke.

The evening and night winds here were, to Pierston's mind, charged with a something that did not burden them elsewhere. They brought it up from that sinister Bay to the west, whose movement she and he were hearing now. It was a presence - an imaginary shape or

essence from the human multitude lying below: those who had gone down in vessels of war, East Indiamen, barges, brigs, and ships of the Armada - select people, common, and debased, whose interests and hopes had been as wide asunder as the poles, but who had rolled each other to oneness on that restless sea-bed. There could almost be felt the brush of their huge composite ghost as it ran a shapeless figure over the isle, shrieking for some good god who would disunite it again. (I ii)

船で死んだ人々の1つに合成された幽霊の、「死者の入り江」から響く音を聞き、別の時には島の小高い禿げ山の頂上で、「石投げ人の放った石が上空の風に乗って飛ぶ音」や「彼らを滅ぼし、その妻や娘と結婚し、接ぎ木の最終の花としてエイヴィスを産んだ侵略者たちの声」(II viii)を聞くのである。Pierstonにとってこの島は歴史的にも個人的にも様々な連想と結びつく、懐かしい場所で、到る所で幻聴や幻想が引き起こされる。実生活上は余り関係を持たないこの島に精神的には強く結び付いていて、磁石のように引き付けられ、操られる。

Pierstonにとって、夢幻のような舞台の上で、作者ハーディ自身の言葉the theory of the transmigration of the ideal beloved one, who only exists in the lover, from material woman to material woman⁶⁾「恋をしている男性の心の中にだけ存在する理想の女性が、生きた女性の身体から身体へ乗り移って行くという理論」というレールに乗り、Pierstonは現実には生きた女性ではなく、自分自身の心の中に存在する女性のヴィジョン、言い換えればthe Well-Belovedの宿った理想の女性を求めて、恋の遍歴を始める。

Pierstonは20歳のとき3年8カ月振りに帰郷し、暫く会っていなかった幼友達Avice Caroに会い、再会の喜びに突然キスされ戸惑いを隠せない。ロンドン生活に馴染んでいる彼にとって、Aviceの無邪気な喜びと歓迎の表現はやや非礼なものに映る。都会で洗練されて帰って来た青年と昔と変わらない純朴さを持った娘、幾年か会わないうちに、この島出身の若い2人の間に認識の差異が出来、小さなわだかまりが生じ、ギクシャクしたものが残った。しかし、その気持ちのずれを修復しながら、2人は次第に親しみを感ずるようになり、結婚の約束をする。Pierstonがロンドンへ発つ晩Aviceは待ち合わせの場所に約束の時間になっても姿を現さない。Aviceはこの石投げ人の島の因習的な考えに基づく昔からの伝統的な結婚の風習を恐れて、彼に会いに来るのを躊躇したのである。この島では婚約した場合、男性の側に相手の女性との婚前交渉権があり、女性に子供が生まれるかどうかを婚前に確認しその結果如何によって婚約が解消できる。彼女が約束通り来なかった理由を書いた、Pierston宛の手紙には、彼がこの風習の履行を主張するのではないかと危惧したとの説明があった。都会の生活に洗練され、古い価値観など既に捨て去っていたPierstonは、この島には生活実感を持たないため、島の古い結婚の風習など「昔の野蛮な慣習」(I iv)にしか思えなかった。

Aviceが約束通り彼に会いに来ていたら、2人は首尾良く結婚して、Pierstonの物語はここで終わっていたかもしれないが、彼女が来なかったことで、その後のPierstonと彼女自身の人生に狂いが生じてしまった。これは実際の生活に余り関わっていないPierstonが理想的な恋愛を求めるとき、愛の対象となる女性の方は当然社会生活を営んでおり、その女性を通して実社会に接触し、社会における問題に遭遇する1つの例である。

PierstonはAviceに衝動的に求婚したが、この時点では、彼女に対する気持ちは恋というより友情であったので、彼の美の精、「恋の霊」であるthe Well-Belovedが彼女に宿っているのか疑問を抱いていた。このthe Well-Belovedは「彼の幻想の崇拝の対象の期間が長いにしろ、短いにしろ、宿った人物の不可欠の成分」と言われるもので、宿っていない場合、結婚の結果は悲惨なものとなるであろう。彼にとって、「恋の霊」はそれ程重要なものであった。

To his Well-Beloved he had always been faithful; but she had had many embodiments. Each individuality known as Lucy, Jane, Flora, Evangeline, or whatnot, had been merely a transient condition of her. He did not recognize this as an excuse or as a defence, but as a fact simply. Essentially she was perhaps of no tangible substance, a spirit, a dream, a frenzy, a conception, an aroma, an epitomized sex, a light of the eye, a parting of the lips. God only knew what she really was; Pierston did not. She was indescribable (I ii)

ちょっとした心の行き違いからAviceとPierstonは結び付くことが出来ない。PierstonはAviceに宿ったと思ったthe Well-Belovedが究極的に1つの場所に落ち着くのか、Aviceが移動の終点であると信じられるのかという不安に取り付かれていた。そしてこのような成り行きの中で彼女にthe Well-Belovedが宿ったのかどうか曖昧のまま放置されてしまう。

Aviceに会えず不満な気持ちを抱いたまま、帰り道に突然降り始めた雨の中を歩いているとき、島の有力な石材商Bencomb家の娘Marciaと出会う。彼女は父親に浪費癖を叱られて、家出をして来たところであった。Pierstonは彼女に金を貸してくれと頼まれ貸す。また、夜道でもあり、雨にずぶ濡れになってしまった彼女を守ってやることとなる。その服を広げて火に当て乾かす内に、立ち上る蒸気に陶醉し、恋の霊の虜になって行く。だが、観念的な恋を追うPierstonがこのように異様なフェティッシュな場面で恋に陥ることは他にない。*The Well-Beloved*は恋愛を主題にする物語なのに肉欲的または情欲的表現に極めて乏しいのが特徴である。

Marciaをロンドンのアトリエに引き取ったPierstonは結婚の準備を始める。Pierston家とBencomb家は島で商売敵であったので、2人はロミオとジュリエット気取りで結婚の日を待つ。しかし、準備の段階に入ったとたんに結婚許可証についての手違いがあるのが分かり、

2人の間にはその雑事が降りかかって来る。結婚にまつわる社会的、法律的な些事に巻き込まれた上、過去から続く両家の敵対関係の確執から逃れられず、およそ美の世界とは無関係な社会的難問が起こって来る。現実の障害に負けた2人の心に溝が広がり、Marciaは父親の許に帰ってしまう。その後、PierstonはMarciaからthe Well-Belovedが姿を消してしまったことに気付く。spirit, emanation, idealism, his Love (I v) などと様々に呼び名を変えられる彼のthe Well-Belovedも結婚を前提とした方向に向うと急にどこかへ飛び去ってしまう。彼の精神は、結婚という形で社会的関係が迫って来ると、それまでは理想の美に到達しようと高揚していても、急速に平凡な市民的モラルのレベルに戻り熱が冷めてしまう。このレベルに到ると結婚を願う女性の中にthe Well-Belovedを最早見出すことが出来なくなってしまう。過去にもPierstonはthe Well-Belovedが軍人の若い娘Elsieに宿ったのを認めたが、その娘が別の人と結婚した後the Well-Belovedが離れて行ってしまったのを経験している。相手が結婚すると知ったとき自殺をしたい程好きだという気持ちであったが、実際の悲しみは彼女の身体に宿ったthe Well-Belovedと離別することであった。これは实际的な日常生活を意味する結婚の中に美の追求という芸術的行為を埋没させてしまうという恐怖感から来るものであろう。現実の前には理想はあえなく潰え去ってしまい勝ちであることをPierstonは無意識に認識しているのであろう。the Well-Belovedを介して特定の女性を愛し、その美を享受するけれども、結婚には興味がない。恋愛の対象を自分のものにしたいという欲求自体に結婚という目的が内在している筈であるが、この観念的恋愛には結婚が引き起こす美の追求の終末と美意識の破滅を回避しようという自己保身の無意識の力が働いている。結婚を避けるためにPierstonのthe Well-Belovedは結婚という事態が近付くと宿主を変え、宿るべき女性の間を永遠に移ろい続けるのである。

第II部ではPierstonはその後も、社交界を泳ぎながら、様々な女性を渡り歩き、40歳となっている。今the Well-Belovedが宿っていると思われるのは美しく若き未亡人Mrs Nichola Pine-Avonであった。彼は気紛れなthe Well-Belovedの化身を発見したと錯覚して彼女に夢中になっている。Nicholaは最初から結婚を考えていたので、彼が結婚をしているという噂を聞くと、たちまち冷淡な態度を取るが、その噂が偽りであることが明らかになると、以前に増して積極的となる。実生活者のNicholaが現実の人生の魅力で彼を縛り、世俗の富と幸福を約束すると、芸術家としてのPierstonは実生活に埋没し理想の愛の追求の道を絶たれてしまうという危機に立たされる。Pierstonのthe Well-Belovedはまたもや結婚という現実的問題を突きつけられるとNicholaの身体から離れ、彼は彼女が果たして真にthe Well-Belovedの化身であったのか疑いを抱くのである。Pierstonの美の理想を求めて彷徨する芸術家としての本質を考えて見れば、彼のこのような逡巡は当然のことと思われる。美の観念が永久に移ろいながら繰り返す出現という連鎖的現象の流れが、結婚生活の現実には断ち切られることを悟

っている彼の芸術的本能が結婚を妨げるのである。「恋の世界の彷徨えるユダヤ人」(II 11)という呪いにかかっていることを認識している Pierston は、Nichola への情熱が急速に冷めてしまい、これまでの例にもれず、彼女に the Well-Beloved が宿ったかどうかすら定かでなくなる。丁度その頃、20 年前に捨てた Avice の死去の報を得た。Avice Caro を捨てたとき抱いた気持ちが甦り、彼女こそ真実の the Well-Beloved の化身であったと改めて実感する。彼の心的風景の中では Nichola のいるロンドンの現実の社交界はどんどん後退して背景となり、前景に石投げ人の島が現れ、死んだ筈の、20 年前の Avice Caro の姿が現実感をもって出現した。Nichola は今まで放っていた輝きを失い、単なる知り合いの普通的女性となってしまった。Avice1 世は死して絶対的に隔絶された距離を保つことにより、以後 Pierston の魂を独占し離れることがなくなる。現実の世界が非現実と化し、実際には手に入れることの出来ない実体のない観念的世界が Pierston を拘束して行く。

Pierston は Avice1 世の死を知ると、急に懐かしい思いが胸の中にこみ上げて来て、彼女の霊に引かれるように故郷の島に帰って行く。古代ローマの時代からの遺跡もあり、異様な伝説と風習を持つこの島を再訪し、Avice1 世の棺を運ぶ人を眺め、昔日の思いに耽っているとき、Avice1 世と瓜二つの娘を偶然見掛ける。彼女は Avice1 世の娘 Ann で、この島で洗濯女として働いている。母ほど知的ではないが、容姿は美しく、Pierston が別れたときの Avice1 世とそっくりなのに吃驚する。正にこれは Avice2 世だというのが脳裏から離れず、ロンドンへ帰ってからも、彼女への思いに取り付かれてしまう。運動がてら、陸揚げされる島からの石を見にテムズ川に行くうちに、石を運んで来た彼女を見付け、彼女を求めて暫く島に住むことにする。the Well-Beloved が Ann に乗り移り宿ったと思い、是非結婚したいと考える。だが、Pierston が彼女の気を引こうと幾ら努力しても全く取合わない。自分は気紛れで、男を次々と 15 人も変えた女性だと言う。或る日 Ann の小さな家を訪ねると、暗い部屋の片隅で人目を避けるようにして、1 人泣いている彼女の姿を見て、Pierston は心を強く動かされた。Ann は好きになってはいけない人を愛してしまい、このままでは身の破滅を招くので島を出たいと訴える。Pierston は、Ann をロンドンの自宅へ連れて行けば彼女の心を捕らえるのに有利であるという恋の打算を働かせて、彼女を苦境から救うべく、ロンドンへ連れて行って召使いとして雇ってもよいと提案する。Ann は彼の提案を受け入れるが、彼の恋心に対しては依然として冷淡な反応しか示さない。実は Ann は既に Isaac Pierston という、彼と同姓の若者と結婚していたのである。それを知り、Pierston は彼女をすっかり諦め、むしろ彼女が不仲となっている夫と和解して、故郷で再出発出来るように取り計らってやる。島に帰った Ann が Isaac の子供を出産したところで、Pierston は Avice2 世である Ann に別れを告げ、第 II 部も終了する。

第 I 部の終わりの場面で、Pierston と同じ様に the Well-Beloved を追い求める女性に対して、

彼がthe Well-Belovedを固定させたら辛いことになる、友人の画家Somersが予言する。だが彼は自分はその化身に何時までもくっついていられたことがないと、その可能性を否定している。確かにこれまでは、Pierstonの追いかけて来たthe Well-Belovedは、「動き回り、捕らえられぬ理想像」であって、決して1人の女性の中に長く留まることなく、捕らえたと思えば忽ち姿を消す妖精のようなものであった。しかし、Avice2世に宿った彼のthe Well-Belovedは彼女の中でずっと動かず姿を消すことがない。

'Behind the mere pretty island-girl (to the world) is, in my eye, the Idea, in Platonic phraseology - the essence and epitome of all that is desirable in this existence... I am under a doom, Somers. Yes, I am under a doom. To have been always following a phantom whom I saw in woman after woman while she was at a distance, but vanishing away on close approach, was bad enough; but now the terrible thing is that the phantom does *not* vanish, but stays to tantalize me even when I am near enough to see what it is! That girl holds me, *though* my eyes are open, and *though* I see that I am a fool!' (II ix)

今まで決して1人の女性の中に留まることがなかったthe Well-BelovedがAvice2世の中に居座り続けている。いくら追い求めても決して捕らえることの出来ない筈のthe Well-BelovedがPierstonの手を伸ばせば届く所で動くことなく踏み留まっているのである。

「40歳の青年」と題する第II部では、女性から女性へと気儘に飛び移る恋の幻がどのように唯一の化身へと定着するか、それがどのようにPierstonを焦らせ、苦しめるのかが問題になってる。以後Pierstonの恋心は、理想美の原型であるAvice1世の心象を求めて、Avice2世、Avice3世へと繰り返される観念的恋愛、Platonic Love又はPlatonic Ideaとなっている。この一方通行の観念的恋愛は芸術家Pierstonが作り上げた美の原型への愛と言える。Avice1世は生存中、Pierstonにとって友情は感じてはいたが愛情の対象ではなく、the Well-Belovedが本当に宿ったのか不安になる程であった。しかし、Avice1世の死により事態は一変する。彼女の死後、an Inaccessible Ghost (II iii) になったとき、彼女は彼の愛の対象そのものになり、the Well-Belovedが宿るところとなる。PierstonはAvice1世に幻想に基づかない真の愛を、この時になって初めて抱くのである (II iv)。死により肉体が不在となり、愛の対象への距離が最大値に達するとき、愛は純化され、至高の位置を極める。最大の距離を置いた対象への愛は、神への愛にも似て、情緒的な交わりを拒否し、対象を一方的に美化し崇敬する絶対的愛に近付き、対象を霊的な存在に祭り上げるという状態になる。彼の気持ちには過去の非情な仕打ちに対する悔恨の情が加わっており、更に「母は私と同じ年頃に男性に裏切られて一生悲しかったです」(II vii) と言うAvice2世の言葉を聞き、贖罪の気持ちに拍車が掛かる。

死という乗り越えられない障壁によって、Pierstonの愛情はAvicel 世から完全に隔てられており、愛を全う出来ないで、変わることは決してない。the Well-Belovedがこうして定着した後PierstonはAvicel2世と出会い、この貧しく無学な娘に母親のperfect copy (II vi) を見る。Avicel2世はPierstonにとってthe phantom of Avicel (II v), the present embodiment of Avicel (II v), the resuscitated Avicel (II vi), the revived Avicel (II vi), the revitalized Avicel (II vii) などと見え、最早無教養な洗濯女ではなく、a sprite, a sylph, Psyche (II x) となり、彼女の中に美の原型としてのアイデアの存在を見るようになる (II vi, II ix)。ここに死せるAvicel 世と生けるAvicel2世であるAnnは完全に重なり合い、同一人物と化したように思われる。Pierstonは自分が20年若返り、昔のAvicel 世の側にいる気にすらなり、Annを常にAvicelと呼ぶ。章題の如く「過去は現在に輝く」(The Past shines in the Present) (II vi) という状態になる。Avicel2世という媒介を通してAvicel 世を見、Avicel 世の幻の中にthe Well-Belovedを認めた。Avicel2世は正にthe revitalized Avicel 又はthe living representative of the dead (II vii) の役割を負わされたのである。Avicel 世はAvicel2世のprototype (II vi), the original woman (II ix) と昇華して行く。Pierstonのthe Well-Beloved、即ちPlatonic IdeaはAvicel 世という具体的な理想像に収斂の場所を見付けることが出来た。彼のAvicel2世への愛はAvicel2世に化身したAvicel 世への愛であり、Avicel2世はAvicel 世への愛の媒体の役割をするに過ぎない。それ故Avicel2世はPierstonにとって、Avicel 世と単に外見が酷似しているというだけで充分であった。ここでPierstonはこの2人の女性の外見的類似はとりまなおさず精神的類似であると考え、それが正しいと思い込むという誤解を犯している。そのため、Avicel 世の化身であるべきAvicel2世の自分への無関心を不思議に思っている。Avicel 世は20年前にPierstonを愛し、腕を彼に投げ掛け、キスをした女性であったから、彼女の化身であるAvicel2世も当然、自分を愛する筈だという幻想を当初抱くのである。理想の愛を見付けることが出来たという熱い気持ちに浮かされ、Avicel2世をあるがままに見られず、その人間性を見失い、an irradiated being, the epitome of a whole sex (II ix) としか見ることが出来ない。一方、Avicel 世が持っていた教養や精神的聡明さがAvicel2世の中には全く欠如していることは認めている。それには目をつぶり、母親と同じ「甘い声」や「はしばみ色の眼」(II iv) に魅了され、無教養な彼女の話の内容には関心を持たず、彼女の語調だけに聞き惚れる。

The subject of her discourse he cared nothing about - it was no more his interest than his concern. He took special pains that in catching her voice he might not comprehend her words. To the tones he had a right, none to the articulations. By degrees he could not exist long without this sound (II vii)

Pierstonにとって、Avice2世は亡きAvice1世その人である。そのため、今the Well-Belovedが宿っているAvice2世はthe Well-Belovedの見せ掛けの場所に過ぎない。実際にはthe Well-Belovedは今やPierstonの手が絶対届くことのない亡きAvice1世に宿っているからである。Avice2世に重ね合わせたAvice1世の姿の中にthe Well-Belovedの存在を認めているのであって、Avice2世の中に認めているわけではないのである。Pierstonのthe Well-BelovedはAvice1世の死という絶対的距離を確保した場所に宿っているので、最早動き回る必要がなくなっている。Pierstonはthe Well-Belovedに近付くことが出来たと思っても、Avice1世のperfect copyであるAvice2世を通して近付いているのでthe Well-Belovedの影に近付いているのではない。死によって到達不可能という場所にいるAvice1世に宿ったthe Well-Belovedは、自らをAvice2世の身体に投影して、Pierstonに追い求めることが出来ないという気持ちを起こさせないだけの適正距離を置いて彼を悩ますのである。彼のthe Well-Belovedは恋の対象に、一定の距離を置くことを条件として成り立っている。

‘Knowing what to expect, I have seldom ventured on a close acquaintance with any woman, in fear of prematurely driving away the dear one in her; who, however, has in time gone off just the same.’ (I vii)

これと同時に、Avice1世に対する婚約の裏切りを、Avice2世と結婚することで償いをしたいという願望が常に見られ、これが彼のAvice2世への愛に永続性を加えていると作者によって説明されている。加えて、先に言及した第1部終わりの場面で、理想の愛を追い求める女性にthe Well-Belovedが宿ることがあったらPierstonはもっと辛い立場になるというSomersの言葉が、Avice2世の場合当てはまることになる。彼女は既に15人もの男性に恋の幻を感じたと打ち明け、Pierstonに大きなショックを与える。彼女は彼と同じく成就不可能な理想の恋を追求する性癖を持つ女性であった。彼はAvice2世の恋の対象の内に一時は入っていた。しかし、それは一時的な対象でしかなかった。それ故、彼が彼女に対して激しい情熱を燃やし続けても、完全に無関心な反応しか返って来なかった。しかもその無関心な反応が彼の情熱を持続させるという悪循環に陥ってしまった。これを断ち切ったのが、Avice2世に夫がいるという現実の社会的規範であった。*The Well-Beloved*は社会的な要素を極力排除した、いわば抽象的な世界において、1人の芸術家Pierstonの内面の問題、創造行為の問題を扱っているのだが、抽象世界に現実が侵入して来ると、抽象性は後退せざるを得ない。

Pierstonは20年後の60歳になって、また20年前のAvice2世との関係と似通った経験をすることになる。Ann Avice Caroからの手紙を受け取ったとき、それまで殆ど忘れていたAvice2世であったが思い出すと懐かしくなり、滞在先のローマから急いでThe Isle of Slingers

を訪れる。かつて美しかった Avice2 世も今や見る影もない。彼女は既に 40 歳。夫が最近事故で死に未亡人となって、「エイヴィス 2 世のやつれ果てた影」(III i) と化している。彼女に会った Pierston は同情の余り、彼女と結婚して余生を過ごそうと思ったが、直後彼女の娘で、今は 20 歳となった Avice3 世を見掛けると、Avice2 世にほんのり名残を留めていたと思えた the Well-Beloved は消え去り、彼女はもう the Well-Beloved の宿っていない虚ろな肉体となっていた。60 歳の Pierston は Avice3 世の中に即座に the Well-Beloved を認める。Avice3 世は「40 年前に彼にキスした、あのエイヴィス」(III i) であった。Pierston は Avice3 世に対しても Avice2 世の場合と同様に、Avice1 世との外観的酷似を見て、彼女に対し恋の虜になる。ここにおいても、彼は Avice2 世や Avice3 世を愛したのではなく、彼女らを媒介にして、亡き Avice1 世を愛したことが明白となる。そこで孫娘のような彼女との結婚を望むのだが、それはまた病弱になってしまった Avice2 世の願いでもあった。Avice2 世は自分の余命が幾ばくもないことを感じている。それ故、実際家の彼女は自分の死後、地位も名声も財力も兼ね備えている Pierston に娘の将来を託したかった。Pierston 自身は相変わらず理想の女性像を追い求めている。Avice3 世との関係も、Avice2 世との関係の、殆ど繰り返して、あたかも同じ恋の物語が 3 度繰り返されているようである。本作品 *The Well-Beloved* は 3 つの部分に分かれていて、Pierston の年齢に応じて、A Young Man of Twenty, A Young Man of Forty, A Young Man of Sixty という題名が付けられているのからも暗示されるように、彼は 40 歳になっても 60 歳になっても、青年時代と同じ様に理想の女性を追い求める。第 I 部では Avice1 世との関係、第 II 部では Avice2 世との関係、そしてこの第 III 部では Avice3 世との関係を中心にして彼の恋の遍歴が展開されるが、その精神は些かも老いを知らない。彼が故郷の The Isle of Slingers で会う 3 人の Avice は何れも同じ姿をしており美しい。

Avice3 世はまたもや、the renewed Avice (III ii), the extraordinary reproduction of the original girl (II ii), the re-incarnate Avice (III iii), a secondary renewed copy of his sweetheart (III iii) などと呼ばれる。3 人の Avice は彫刻家 Pierston にとって美の女神 Aphrodite そのものとなり、そのすべてを知悉している存在となっていた。

The Goddess, an abstraction to the general, was a fairly real personage to Pierston. He had watched the marble images of her which stood in his working-room, under all changes of light and shade - in the brightening of morning, in the blackening of eve, in moonlight, in lamplight. Every line and curve of her body none, naturally, knew better than he; and, though not a belief, it was, as has been stated, a formula, a superstition, that the three Avices were interpenetrated with her essence (III ii)

それ故、Pierstonが母親Avice2世に娘Avice3世と結婚したいと言うとき、Avice3世のことはAvice1世とAvice2世の考え方や感じ方を既によく知っているから、充分に予測出来る。もうこれ以上Avice3世のことを詳しく知る必要はないと断言している。

Virtually I have known your daughter any number of years. When I talk to her I can anticipate every turn of her thought, every sentiment, every act, so long did I study those things in your mother and in you. Therefore I do not require to learn her; she was learnt by me in her previous existences. (III iii)

PierstonのAvice3世の内面への洞察は極めて希薄となっている。彼は相手についての観察や、相手側の立場に立った配慮に欠け、ただ自分の欲求に従い、満足を得るために行動を起こす。Avice1世への愛を原型としたAvice2世、Avice3世への愛は、Pierstonを20年前、更に40年前の昔へと引き戻す。その昔には彼もAvice1世と同様に20歳の若者であった。彼の造り上げた理想の恋人像としてのAvice1世を媒介にして、20歳の青年に戻り、精神的に若返る。Avice2世、Avice3世を介在して青春の回復を体験する。

Avice2世にthe Well-Belovedが宿った20年前に、彼女の中に既に「青春と幼い日々の魅力の一切」(all the charm of his youth and his early home) (II viii)を見出しており、Pierstonは自分では若いと思っただけでも精神的若さも後退していることが暗示されている。肉体的な面でも年齢にしては、若いと自他共に認めているが、心身共に若いAvice2世は、Pierstonが自分の結婚相手には年を取り過ぎている(II viii)と言って、彼に肉体的な時間の流れの痕跡を認めさせた。加齢という現実とは、それから20年後益々Pierstonに襲い掛かって来ている。Avice1世の代理で、彼女への愛の媒体に過ぎないAvice3世に、Pierstonが一目見て魅惑され、その祖母への償いの意味を含めて求婚するのも、Avice2世の場合と同じであるが、彼女との40歳の年齢の開きに強い引け目を抱いているのも事実である。一方、美の理想としてのthe Well-Belovedは、宿るべき実体である女性の身体を次々に移動しながら、年を取らず、永遠の若さを保ち続けている。現実の世界に生きているPierstonは時間の流れに抗し得ず冷厳な事実として老年を受容し、現実の人生を直視しざるを得ない。

Pierstonはthe Well-Belovedを今まで追求して来た際、彼を取り巻き、または否応なしに襲い掛かって来る実人生の現実と美の理想の追求という対立する問題に幾度も直面したが、現実生活を極力無視しながら、the Well-Belovedを媒介として現実の生身の女性と関わろうとした。Pierstonは新進気鋭の彫刻家で、将来を嘱望された芸術家として登場し、作品の進展に連れ芸術的名声を増して行く。Avice1世とAvice2世へのthe Well-Belovedの宿りの合間に、Pierstonは現実世界から孤立して芸術の世界に閉じ籠もっているとき、心の自由を得て、最

も充実した仕事が出来、芸術的に成功し、40歳になった頃にはRoyal Academyの会員で、彫刻界の第一人者となっていた。一方、the Well-Belovedを追求しているときには、実際の芸術活動は何も出来ない。殊にAvic3世のことでAvic2世と交渉していた数ヶ月は、those months of despondency when all seemed going against his art, his strength, his happiness (III iii) であった。Avic1世の場合、別離の後の20年間未だthe Well-Belovedが宿っていることを認識されなかったもので、極たまにしか思い出されるに過ぎなかった。また例え、Pierstonが彼女にthe Well-Belovedの宿りを認識していたにしても、死後もその死によって、Avic1世はこの世の実人生から絶対的に隔離されているので、彼は彼女を通して現実社会に接することがない。こういう彼女に宿ったthe Well-Belovedを芸術の糧としたならば、恋の遍歴を続けるPierstonの苦悩は現実社会に煩わされることなく、純粹に芸術の世界で昇華され得たであろう。このようにAvic1世の場合は、Pierstonと現実社会が結び付けられることがなかったので、いずれにしても彼の創作活動は妨げられることはなかったであろう。一方、Avic2世とAvic3世の中に、Avic1世に宿ったthe Well-Belovedを追求することは、必然的に市民的な意味での様々な生活条件を彼の生活の中に持ち込むことになる。殊にAvic3世との関係においてこのことは著しい。彼女の中に、Pierstonがthe Well-Belovedを発見し、恋をするところまではこれまでと変わっていない。だが母親Avic2世の執拗な援助によって、この関係は市民的、日常的レベルへと移行する。Avic3世へのPierstonの求婚と、母親Avic2世の彼に対する助力という行為は、彼にとって最早美の追究ではなく、市民的モラルを受け入れる過程の始まりである。

Avic3世は母Avic2世の肉体的理想美と祖母Avic1世の精神的理想美を結合した存在としてPierstonに認識された。肉体的及び精神的理想美を具現した対象—Avic3世—にやっと遭遇出来たPierstonであったが、このような女性を前にして直面する現実とは、今度は自分自身の問題—自らの着実な老いという現実—であった。永遠の美に対立する現実として時間の不可逆性がある。この痕跡を自分の肉体に認めたとき、理想美追求の世界に浸っていたPierstonは、現実の世界に引き戻される。或る時、鏡に偶然映った我が身を見て愕然とする。時間の流れが人間に関係すると、肉体的な衰えばかりでなく、社会的常識や因習的圧力となって襲って来るし、2人の若いAvicたちの年齢への当たり前の感情の反応でも、Pierstonにとっては嫌悪感を伴って苦しめる。同時に自分自身も老いぬ魂と外見的な変化のギャップに苦痛を感じる。

His position was facing the window, and he found that by chance the looking-glass had swung itself vertical, so that what he saw was his own shape. The recognition startled him. The person he appeared was too grievously far, chronologically, in advance of the person

he felt himself to be. Pierston did not care to regard the figure confronting him so mockingly. Its voice seemed to say 'There's tragedy hanging on to this!' But the question of age being pertinent he could not give the spectre up, and ultimately got out of bed under the weird fascination of the reflection. Whether he had overwalked himself lately, or what he had done, he knew not; but never had he seemed so aged by a score of years as he was represented in the glass in that cold grey morning light. While his soul was what it was, why should he have been encumbered with that withering carcase, without the ability to shift it off for another, as his ideal Beloved had so frequently done ? (III iv)

このPierstonの慨嘆は第II部第xii章のWhen was it to end - this curse of his heart not ageing while his frame moved naturally onward? Perhaps only with life.という嘆きの言葉を想起させ、'I have lived a day too long.' (III vii) という感懐へと繋がって行くものである。彼はこの時漸く現実の世界に目覚め、変化を受け入れようとする。

Pierstonの現実の「時間」を無視する理想美の追求は、徐々に達成不可能であることが明らかになる。内面的衝動に突き動かされての理想美追求を呪いと感じざるを得なかったPierstonは、40歳となった第II部で「時間の経過」を新たな相手としなければならなくなる。無教養な洗濯女に過ぎないAvice2世が19歳で華やぐ若さを備えているのに比べ、中年期にある自分は40歳で彼女の年齢の2倍であると意識し、「不愉快な気持ち」となり初めて年齢を意識する。年齢が肉体に及ぼす大きな影響を考え、気持ちは若い時のままなのが、不幸のもとになっていると感じ、昔気質などと言われる人々を見て、They had got past the distracting currents of passionateness, and were in the calm waters of middle-aged philosophy. (II vi) と羨ましく思う。年を取り過ぎて恋愛の対象にならないとAvice2世に言われたPierstonは、彼女の愛が得られないことを悟り、「時」の嘲笑を感じざるを得ない。しかも、60歳になった今、年齢に起因する悲劇度は更に増して来る。孫のような年齢のAvice3世にのぼせ上がる愚かな夢想家だと自嘲し、年齢の開きに強い引け目を感じる余り、

When he had bidden her farewell, and she had entered, leaving him in the dark, a rush of sadness through Pierston's soul swept down all the temporary pleasure he had found in the charming girl's company. Had Mephistopheles sprung from the ground there and then with an offer to Jocelyn of restoration to youth on the usual terms of his firm, the sculptor might have consented to sell a part of himself which he felt less immediate need of than of a ruddy lip and cheek and of an unploughed brow. (III ii)

自分が60歳であるという事実を Avice3 世に悟られるのを極度に恐れ、明るい光の中で彼女と顔を合わせることを避け続ける。プロポーズへと進むまでの間、彼は Avice2 世と Avice3 世の2人と連れ立って、太陽の下でなく月の光の中を何度も散歩する。Time was against him and love, and time would probably win. (III iii) という予感を抱く。また、友人の画家 Somers の老いぼれた姿を見て、自分の年齢への認識を促され、年若い Avice3 世との結婚を断念し、彼女の許を去ろうと決心する。しかし、この後すぐに Avice2 世が病気と知り、見舞う。Avice2 世は娘に既に意中の人がいるのを承知で彼との結婚を促し、Avice3 世も病床にある母親の願いに屈して、彼との結婚に同意する。Pierston も決心を変え Avice2 世のたつての願いを受け入れる。

Avice3 世の Pierston との結婚のためらいの、もう1つの理由は彼の年齢であった。そしてこの段階に到って、Pierston は初めて年老いた姿を日の光の下に現し、彼女に驚愕を与える。今まで Avice3 世は夕暮れの暗がりの中や月明かりの下でばかり会っていたので、Pierston は30歳位に見え、若い人だと思い込んでいた。Pierston が彼女に自分はとても年寄りであると言ったとき、彼は彼女の眼には「自分に相応しい夫」としてではなく、a strange fossilized relic in human form (III iv) として映る。結婚のためにどんな好条件を示されても、Avice3 世は男性としての Pierston を嫌悪するようになる (III v)。

若い女性を老齢の男性が手に入れようとするときには、金銭的物質的な力を誇示するしかない。自分自身の理想美の追求のためと、Avice1 世を見捨てたことへの償いとそれと同根の Avice2 世の頼みなどを果たすために、Pierston は物質的恩恵として、ロンドンにアトリエ付きのケンジングトン風の新しい赤い家を手に入れて、Avice 母娘を招待し、Avice3 世にその家具調度に関心を抱かせ、彼の妻となることの物質的利点を印象付けようとした。しかし、一旦は母の意に従って Pierston との結婚に同意した Avice3 世だが結婚式前夜に、彼女を訪ねて来た昔の恋人 Henri Leverre が病気で衰弱しているのを知り、同情心を起こし、彼を見放すことが出来なくなって駆け落ちする。彼女は安定した結婚生活より、女の動物としての本能に従って行動を起こしたのである。この青年は Pierston の昔の恋人 Marcia の義理の息子であった。結婚式の差し迫った土壇場での予期せぬ出来事でショックを受け心臓発作を起こして、Avice2 世は死んでしまう。

ハーディは作品中でしばしば「時の残酷さ」を指摘している。老いというのは Time's revenges であると作者は解釈しており、この第III部は「時」の破壊力を最大のテーマとしている。各部の題名に入れた年齢は肉体的老化を示しており、共通する A Young Man の話は心の若さを示していると考えられる。時と老齢の無惨な仕打ちは義理の息子の駆け落ちを心配して探しに来た Marcia にも認められる。She stood the image and superscription of Age - an old woman, pale and shrivelled, her forehead ploughed, her cheek hollow, her hair white as

snow. (III viii) このような肉体と心の不条理な在りよう、即ち年を取っても衰えぬ情熱 (throbbings of noontide)⁷⁾ への嘆き、心に比して肉体が、「時」の前に何と脆いかという自分の個人的感懷を、作者ハーディは *I look into my glass* とい短詩にペーススを込めてうたっている。この詩は *The Later Years* の 1892 年 10 月 18 日付けの文章⁸⁾ から察して、*The Well-Beloved* が書かれた頃の作である。加齢に伴う肉体的衰えは容赦なく Pierston にも襲い掛かる。

Avice2 世の葬儀の喪主までしてやった後、ロンドンへ引き上げた Pierston は、心身共に疲れ果て熱病に倒れ、一時死線をさまよう状態にあった。意識を取り戻したとき、全くの別人のようになっていた。彼からは美的感覚も創作意欲も消え、the Well-Beloved の宿りもなくなり、ただ老いのみを感じるのである。

He looked round upon the familiar objects - some complete and matured, the main of them seedlings, grafts, and scions of beauty, waiting for a mind to grow to perfection in.

'No - I don't like them!' he said, turning away. 'They are as ugliness to me! I don't feel a single touch of kin with or interest in any one of them whatever.'

'Jocelyn - this is sad.'

'No - not at all.' He went again towards the door. 'Now let me look round.' He looked back, Marcia remaining silent. 'The Aphrodites - how I insulted her fair form by those failures! - the Freyjas, the Nymphs and Fauns, Eves, Avices, and other innumerable Well-Beloveds - I want to see them never any more!... "Instead of sweet smell there shall be stink, and there shall be burning instead of beauty," said the prophet.'

And they came away. On another afternoon they went to the National Gallery, to test his taste in paintings, which had formerly been good. As she had expected, it was just the same with him there. He saw no more to move him, he declared, in the time-defying presentations of Perugino, Titian, Sebastiano, and other statuesque creators than in the work of the pavement artist they had passed on their way. (III viii)

重い熱病が治った彼は、もうこれまでとは同じ人間ではなかった。自分のアトリエの彫刻も、ロンドンのナショナルギャラリーの巨匠たちの絵も、どんな美術作品を見ても美的感興も湧かない。しかもしばしば3人の Avice に擬していた Aphrodite をもう2度と見たくなくなっていた。彼に最大の悲しみをもたらした審美的能力が彼の身体からすっかり消え失せてしまっていた。'...Thank Heaven I am old at last. The curse is removed.' (III viii) の言葉は理想美を追求することが、彼が自然な状態で精神的に老いて行くことを妨げ、苦痛を感じさせ

て来たことをはっきりと表している。もっとも理想美追求は、呪いだけでなく、恵みをもたらしていた。彫刻家としての彼の芸術的創造のエネルギーの源泉となっていて、かつては the Well-Beloved が宿ると思われる女性を見れば、その跡を付けてロンドン中とて構わず動き回ったことがあった。それは彼の professional beauty-chases (I ix) のためであり、その行為を通じて、彼は舞台女優、社交界の女性、女店員、女流作家、ピアニスト、ダンサー等あらゆる職種の女性に the Well-Beloved を見出した。そしてそれを塑像に表現し、固定して、永続化を試み、その結果 Royal Academy の会員となるという職業上の成功まで収めることが出来た。

Pierston の生命力の源泉である「美に対する感覚」「美の追究」は彫刻家としての芸術的感覚であると同時に、生涯に亘って美の化身を追い求めて来た彼にとって、the Well-Beloved の根源でもあり、彼の恋愛の形やエロスをも意味している。それ故、美に対する感覚、即ち his sense of beauty in art and nature (III viii) が消失したことは、a metaphor for the general loss of vital energy⁹⁾ ともなっており、芸術的な事象に対して、無感覚な反応や嫌悪感を示すようになる。Avic3 世の外観的な美によって心を煩わすこともなくなり、彫刻家としての創作力はこの時点で失われてしまったのである。愛の観念的妄想からも、美的感覚からも解放されて芸術的創作意欲も失う。ここに性的欲求と活動力が不可分の関係にあることが示されている。彼の鑑識眼はもう実際の事柄に対して機能するだけである。

Pierston 自身は性的衝動による the Well-Beloved の宿りに苦しんで来たので、この現象を前述のように「呪いが解けた」とむしろ喜んでいる。これに伴い生活の比重が芸術中心の生活から実際の日常生活に移ったことにより、女性の美への関心が全くなくなってしまう、40 年振りに再会した老醜の身と化している Marcia を喜んで受け入れることとなる。こうして歳月に蝕まれた彼女の容姿を受け入れるということは、Pierston が自分自身の老いを受容することでもあった。その結果、若さに執着し、老いに拮抗するという姿勢を捨てることの出来た彼は、半面活力や感受性が減退し、老け込んでしまい、服装も地味になり、顎髭は白くなり、頭は殆ど禿げてしまったので実際は 62 歳であったが 78 歳で通ったかもしれない (III viii) と言われる程老いてしまった。

彫刻家としての仕事をやめ、故郷の島に帰った Pierston は、茶飲み友達、生活協同者を得るために Marcia と結婚し、実生活者として平静な家庭生活に浸りながら、老後を送ることとなる。Pierston は芸術家としての人生を捨て去ることにより、実人生の平穏な生活に解放されるという皮肉な結末を迎えるが、島での彼の行為がそれを暗示、象徴している。汚染の起こる恐れがあるために、ウェルズ通りにある天然の泉を塞いで、パイプで給水する計画を自費で進め、またかつては非常に愛した some old moss-grown, mullioned Elizabethan cottages を購入し、取り壊して、十分に換気装置の付いた、湿気のない新しい家に立て替え

て行くことを実行する。

His business was, among kindred undertakings which followed the extinction of the Well-Beloved and other ideals, to advance a scheme for the closing of the old natural fountains in the Street of Wells, because of their possible contamination, and supplying the townlet with water from pipes, a scheme that was carried out at his expense, as is well known. He was also engaged in acquiring some old moss-grown, mullioned Elizabethan cottages, for the purpose of pulling them down because they were damp; which he afterwards did, and built new ones with hollow walls, and full of ventilators. (III viii)

衛生的であり、しかも便利であるという近代の実用主義的な価値観によって、この昔から存在する the old natural fountains を封鎖するという行為は、彼の枯渇してしまった想像力や失ってしまった that ever-bubbling spring of emotion (I ix) を表している。この古い泉は近代生活のもたらした表面的な生ではなく、人間の持つ、古い、深いところにある、人間の本然のもの、審美観、創造性、情熱などの、生の諸々の源泉を表していると言えよう。また、Avice2世の住まいでもあった懐かしい、詩趣に富んだエリザベス朝風田舎屋の建て直しは彼の完全消滅した the Well-Beloved を暗示している。Pierstonにとって性的衝動の消失は生命力の衰え、希望に対する諦め、習慣への和合、思想力の低下等を生じさせたのである。性的衝動と共に美的感受性を失った一方、老齡との葛藤は取り除かれ、實用本位の価値観の持ち主となった Pierston にとって、この生活は、主観的には、幸福な結果であった。

しかし、Pierston が最後になって美意識を失うことが、今まで支えていた美術的観念論の敗北を意味するとすれば、ハーディの形而上学にも一貫性がないことになる。一貫性があるとする、最後まで徹底的に美と愛の理想を追求することによって、完全な美意識や恋愛至上主義がそれと対極に存する常識的市民の倫理性または人格を破壊し、主人公を悲劇的結末に追いやったであろう。だが実際には、Pierston の行く末は Marcia との結婚生活、その結婚によって生じた Avice3 世夫妻との親子関係などにより、いよいよ実生活に深く根を降ろした、故郷の島の生活に埋もれたものとなって行く。彼自身は、「1日を余りにも長く生き過ぎた」と慨嘆するほどの老境に到った自己認識を持ち、Avice3 世が夫婦仲の悪さについて泣き言を言い、家に帰って来ても、それを軽くいなして理性的な忠告を与えたりする。彼の過去の主観的で、情熱に突き動かされ易い空想的気質と対比すると、ここにはハーディの皮肉な響きと突き放しが感じられる。

The Well-Beloved は 1912 年のウェッセクス版の序文に *The Trumpet-Major* などの作品と同じく、Romances and Fantasies という分類の中に含まれている。捕らえることの出来な

い理想の女性を追い求めて彷徨する男の寓話的物語として、Fantasyの世界において描いた作品であるが、一般にハーディ作品のうち最も評価の低いものの1つである。着想のスケールの小ささ、テーマの非現実性、登場人物の性格描写の貧弱さ、更に余りにも観念的でむしろ詩に向いている、むき出しの思想性といった指摘など枚挙にいとまがない。

各部の類型的題名、主人公の整然とし過ぎた20年間隔の青年像、それに対して恋の霊の具現者としての女性Avicé1世、Avicé2世、Avicé3世の配置、他の女性との駆け落ちによる主人公のAvicé1世に対する裏切りと、その報復的結果として、Avicé2世やAvicé3世の別の男性との駆け落ちなどによる主人公に対する裏切り、Avicé3世の恋人がMarciaの義理の息子であるという偶然性、20歳の時にロミオとジュリエット気取りだったPierstonとMarciaが老醜の姿になって結婚することになるアイロニーなどという、過剰な技巧性や偶然の一致。これらはハーディの小説の技法として批判の集中するものである。これらが臆面もなく用いられ、観念的美意識—Platonic Idea—をあからさまに主題としているこの作品は、前作*Tess*のような現実と理想の相剋もなければ、*Jude*におけるような霊と肉の葛藤もない。

しかし、これは作者ハーディの観念的理想美追求の行為に対する夢を実現した作品と考えれば、この時期の作者の根底にある美意識を表しており、作者に対する理解を深め、興味を引き立てるのに有益な作品といえよう。

註

- 1) Millgate, p 329
- 2) Taylor, pp 157-160
- 3) *The Later Years*, p 59
- 4) *The Early Life*, p 284
- 5) Pierstonの、この様な故郷との関わり方には作者ハーディのそれと酷似したものがある。ハーディはDorsetshireの首都であるDorchester近郊の石工の息子として生まれ、高名な小説家となった。故郷は彼の小説世界の主要な基盤となっていたが、ハーディはロンドンの社交界や外国とDorchesterにある邸宅Max Gateを往き来するだけで、故郷の人々にとっては異邦人と同じであった。即ち、Wessexという創造世界を通して故郷に関わっていただけであった。
- 6) *The Later Years*, p 59
- 7) *The Complete Poetical Works*, p 106
- 8) *The Later Years*, p 13
- 9) Bullen, p 233

参考書誌

- 1) *The Well-Beloved*, The New Wessex Edition, ed by P N Furbank, Macmillan, 1976
- 2) *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy*, ed by Samuel Hynes, The Clarendon Press Oxford, 1982
- 3) Hardy, Florence Emily, *The Early Life of Thomas Hardy 1840-1891*, Macmillan, 1928
- 4) Hardy, Florence Emily, *The Later Years of Thomas Hardy 1892-1928*, Macmillan, 1930

- 5) Bullen, J.B., *The Expressive Eye*, Clarendon Press Oxford, 1986
- 6) Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969
- 7) Guerard, Albert J, *Thomas Hardy*, New Direction, 1964
- 8) Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975
- 9) Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet*, David and Charles, 1976
- 10) Hurst, Alan, *Hardy An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980
- 11) Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography*, Oxford University Press, 1982
- 12) Saxelby, F Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary*, Greenwood Press, 1980
- 13) Taylor, Richard H, *The Neglected Hardy*, Macmillan, 1982
- 14) Thurley, Geoffrey, *The Psychology of Hardy's Novels*, University of Queensland Press, 1975
- 15) 大沢 衛 (編) 「ハーディ研究」(現代英米作家研究叢書) 英宝社, 1976
- 16) 大沢 衛・吉川道夫・藤田 繁 (編) 「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」篠崎書林, 1978
- 17) 小田 稔 「トマス・ハーディ」篠崎書林, 1990
- 18) 本田顕彰 「ハーディ」(20世紀英米文学案内4) 研究社, 1969
- 19) 英国小説研究 第16冊 英潮社1992